

【 1 】スピノザの哲学について

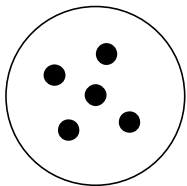
- 岩波新書の帯、『意志、感情、自由、国家 この思考は、人間のすべてを根底から覆す』
- スピノザ(1632-1677)の生きた十七世紀というのは、現代の私たちにまで続くさまざまな学問や制度がヨーロッパに概ね出揃った時代 / 制度として重要なのは近代国家 / 近代科学もこの時期 / 十六世紀から続く宗教戦争がヨーロッパを荒廃させ、その廃墟の中からもう一度、すべてを作り直さなければならないというのが十七世紀の思想的課題 / 十七世紀はある意味で転換点であり、ある一つの思想的方向性が選択された時代 / 歴史に「もしも」はありませんが、しかし、もしかしたら別の方向が選択されていた可能性もあったのではないかと考えることができる / スピノザ哲学はこの可能性を示す哲学 (國分功一郎『はじめてのスピノザ 自由へのエチカ』 p.133)

【 2 】「近代」は危うさを孕んでいる

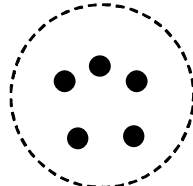
- 独占資本を解体し、地方分権体制や自由主義経済の促進が訴求され、共和制政治を目指した無提督時代、すなわちオランダ黄金時代は、同時に、それを主導した首相ヤン・デ・ウィット(1625-1672)を、スケープゴートのように民衆が虐殺する、という事件をも引き起こす(ヤン・デ・バーン「デ・ウィット兄弟の亡骸」『中野京子と読み解く フェルメールとオランダ黄金時代』 p.196 - p.197)。ここには、「近代」の危うさ、すなわち、ひとたび籠が外れれば、ばらばらになってしまう危うさの一端をみることができる。

〈 近代のイメージ 〉

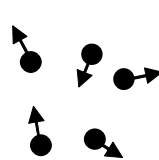
① [紐帯]



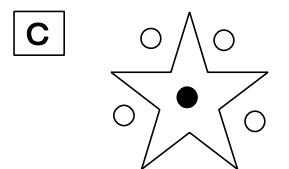
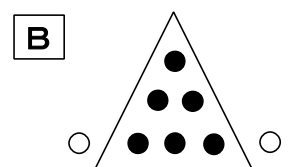
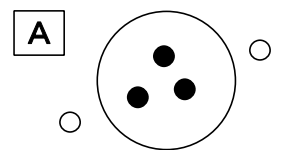
② [紐帯が解ける]



③ [デラシネ???]



④ [編み直す]



[背景]

宗教や神学が規範としての拘束力をもたなくなったところで、いかにして安定した統治と支配を実現できるか(p.375 大竹弘二『公開性の根源』 孫引き)

ばらばらになってしまう
危うさがともなう!

- 十七世紀以降、デカルト(1596-1650)、ロック(1632-1704)、ホッブズ(1588-1679)が説く「近代的自我」や、「(意識をその根拠とするいわゆる)近代的個人」や、「(一回性の)契約」といった思想的方向性が、近代を形作り、現在の私たちにまで続いている。また、カルロ・ロヴェッリ(1965-)の『時間は存在しない』でもみてきたように、私たちの「時間」も、ニュートン(1642-1727)に端を発する、いわば制度だった。ところが現在、これらの思想(による紐帯)が行き詰まりをみせたり (カトリーヌ・マルサル(1983-)や、斎藤幸平(1987-)の分析する[ジェンダー][経済]、また、別の思想的可能性が開かれつつある(マルクス・ガブリエル(1980-)の[世界]や、上述のカルロ・ロヴェッリの[時間]、等々)。

【 3 】スピノザの思想の面白さ

● スピノザの思想が面白いのは、すでに、近代の黎明期において、これらの行き詰まりや、思想的可能性を示唆していたことであり、さらに、行き詰まりの思想をたんに覆すのではなくて、その思想に入っていて(読む人となって)、どうすればその(不徹底な)思想が十全なものとなるかを考えている、ということだといえる。

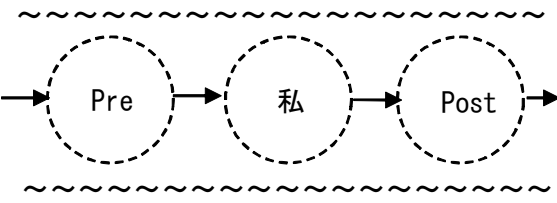
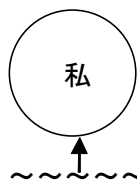
スピノザはデカルト批判の書を書いているのではない。彼の哲学の解説をしているのである。(中略)どうすれば整合的にこの哲学の出発点を解釈できるだろうかと考えるのだ。(p.41) / (神の観念の形成と神の存在照明のくだり) スピノザの指摘はデカルトが性急に結論を出していることへの批判である。(p.63) / (自然権のくだり) スピノザはホッブズを読むにあたっても、いつものように、読む人としての本領を発揮している。自然権を放棄できるはずがないというのは、ホッブズのその定義を徹底することで得られるものである。スピノザはホッブズの考える自然権に現れる矛盾を出発点に、より整合的な解釈を提示し、いわば、ホッブズの概念のホッブズよりも上手に扱うわけである。(p.255)

● スピノザが近代とは別の方向を示すことができたのは、ユニークな「神」の考え方があったからではないか。神が神であるのはその「本質 Essencia」ゆえのこと / 我々は本質というとその物の奥底にある何かを想像してしまう。しかし、神の本質は、神のうちに想定される<もの>ではなくて、神が存在しているという事実そのもの、無限に多くの属性からなる実体として存在しているという<こと>そのものである。 / スピノザはどこかに存在しているはずの神の存在証明を行ったのではなくて、神が自然としてここに存在していることを描写しているのである。(p.147)

すべて在るものは神のうちに在る / あらゆるものが神の一部である / 神こそは存在する唯一の「実体 substantia」であり、様々な個物はその実体の「変状 affectio」として捉えられることになる。(p.154)

ここであつじ読書会の履歴から、遠藤周作(1923-1996)の『深い河』を想起してみたい。

「神」を、私たちひとりひとりがそのただなかに浮かぶ「深い河」として考える。

[転生]	[経済人 (カトリーヌ・マルサル)]
 「私」はあくまで結節点。 神のうちに在ること(『深い河』の一部であること)が没却されていない。 ※大津の玉ねぎの転生(神は存在というより、働きです。玉ねぎは愛の働く塊りなんです。(『深い河』 p.160)) ※磯辺、大津、成瀬美津子、江波、沼田、木口...	 「私」が起点 神のうちに在ること(『深い河』の一部であること)が没却される。忘れていることが忘れられている。現在まで間断なくつながる歴史(歴史としての契約 p.263) などなかったかのように(無関係を装って(悪びれて))、私を起点としてしまう。 (中立的な意識と『自由意志』 p.300)

すなわち無知者は、(中略) 自己・神・物をほとんど意識せずに生活し、そして彼は働きを受けることをやめるや否や同時にまた存在することをもやめる。これに反して賢者は、賢者として見られる限り、ほとんど心を乱されることがなく、自己・神および物をある永遠の必然性によって意識し、決して存在することをやめず、常に精神の真の満足を享受している。(p.325)

(永遠の)必然性にうまく従って生きることができたとき、人は自由になるのだ。(『はじめてのスピノザ』 p.97)

【 おまけ その１ 】

●『スピノザ 読む人の肖像』(岩波新書)と『はじめてのスピノザ』(講談社現代新書)

『はじめてのスピノザ』は読みやすく、『読む人の肖像』でやや難しいところは、前者にあたると理解が深まる。

【 参考まで 】

『スピノザ 読む人の肖像』		『はじめてのスピノザ』
第一章 読む人としての哲学者		第一章 組み合わせとしての善悪 / 第五章 神の存在証明と精練の道
第二章 準備の問題		第四章 真理の獲得と主体の変容
第三章 総合的方法の完成		第五章 神の存在証明と精練の道
第四章 人間の本質としての意識		第三章 自由へのエチカ
第五章 契約の新しい概念		第二章 コナトゥスと本質
第六章 意識は何をなしうるか		
第七章 遺された課題		

ただ、「第六章の 意識は何をなしうるか」の意識についての内容は、今回の『スピノザ 読む人の肖像』で深掘りされていて興味深い。「良心と意識の区別は存在しなかった」というものだ。

良心という善悪の審判を心の内にもっていると想定することは、善にも悪にも舵を取ることができる中立的な意識がまずあって、その上でこの意識が良心を参照して行動を決めていると考えることだ。ところがスピノザは、善と悪の判断から独立して中立的な意識が存在するという考えそのものを否定しているのである。(p.288)

意識は身体の変状に基づいて、常にあらゆる事象について、善いとか悪いといった判断を下してしまっている。(p.302)

いかにして自分はこのような状態に至ったのか、自らの身体のいかなる特性が自分をしてこのようなことを為さしめるに至ったのか、それを十全に理解することは、混乱した観念を因果関係のもとに解きほぐすことを意味する。言い換えれば、私の変状の知覚をこの変状の原因の観念へと変換していくのだ。そうして解きほぐされて明らかになった因果関係についての観念は、その人間の思惟の力を十全に表現するものであろう。そして、もともとあった感情はその人間の思惟の力を十全に表現するものであろう。そして、もともとあった感情はその人間の思惟の力のもとに置かれることになるだろう。(p.329)

この「意識の弁証法(p.336)」は、夏目漱石(1867-1916)『模倣と独立』(1913)の次の記述を想起させた。

元来私はこういう考えを有もっています。泥棒をして懲役にされた者、人殺をして絞首台に臨んだもの、——法律上罪になるというのは徳義上の罪であるから公に所刑せらるるのであるけれども、その罪を犯した人間が、自分の心の径路をありのままに現わすことが出来たならば、そうしてそのままを人にインプレッスする事が出来たならば、総ての罪悪というものはないと思う。総て成立しないと思う。それをしか思わせるに一番宜いものは、ありのままをありのままに書いた小説、良く出来た小説です。ありのままをありのままに書き得る人があれば、その人は如何なる意味から見ても悪いということを行なったにせよ、ありのままをあ

りのままに隠しもせず漏らしもせず描き得たならば、その人は描いた功德に依って正に成仏することが出来る。法律には触れます懲役にはなります。けれどもその人の罪は、その人の描いた物で十分に清められるものだと思う。私は確かにそう信じている。けれどもこれは、世の中に法律とか何とかいうものは要らない、懲役にすることも要らない、そういう意味ではありませんよ。それは能く申しますと、如何に傍から見て気狂いじみた不道德な事を書いても、不道德な風儀を犯しても、その経過を何にも隠さずに銜わずに腹の中をすっかりそのままに描き得たならば、その人はその人の罪が十分に消えるだけの立派な証明を書き得たものだと思っているから、さっきいったような、インデペンデントの主義標準を曲げないということは恕すべきものがあるといったような意味において、立派に恕すべきであるという事が出来ると、私は考えるのであります。

● 日本近代の黎明期、近代国家の成立によって、善悪の審判が制度化(= 外部化)され整備されていくとき、漱石は、罪を犯したものを法律上、罪になるから、「罪悪」だ(あるいは「無罪」だ)とすることに、(注意深く留保をつけながら誤解を招かないように) 異を唱え、そうではなく、その罪の清められることを説いている。すなわち、スピノザが説くのと同様に、人はすでに、善なり悪なりに生きてしまっているのであり、むしろ肝要なのは、それがなぜそのような状態に至ったのかを隠さずに銜わずに明らかにすることなのだ、と(この、明らかにする過程が、「意識の弁証法」として示される運動ではないだろうか)。

外部化された法律と照らし合わせて、「これは合法的」などという形骸化された判断がまかり通ってしまう危険を漱石は見透していたように思え、またそれはスピノザのいう意識のあり方とも通底するようだ。

松浪信三郎(1913-1989)の『哲学以前の哲学』(岩波新書)も、「良心と意識は決して別々ではない」として、「たえず自己吟味する良心」あるいは「良心は、「自己自身の行為についての責任者は、自分である」という意識である。」として、意識のはたらきを考察している (p.80)。

【 おまけ その 2 】

● 指摘で、ピルグリム・ファーザーズの来歴に、オランダの市民社会があることが興味深かった。アメリカはまさに近代の申し子として建国されたのだとすると、現在の行き過ぎた資本主義の手前に、平等な市民社会を実現する段階はなかったのだろうか、とも思う。

柄谷行人(1941-)は『哲学の起源』で、イオニアのイソノミア(無支配)に類似する参照例として 18 世紀アメリカのタウンシップをあげている。イギリスはすでに市民革命(1648 年、ピューリタン革命)が経ており、植民者と母国のつながりが希薄であったため、自由で平等なタウンシップを形成することができたという。

アメリカ独特の市民社会のシステムは東部にあるイギリスの植民地において形成されたのである。それがタウンシップと呼ばれるものである。たとえば、入植者はタウンに入ると、一定の土地を与えられる。それ以上の土地をもつことは許されるが、事実上不可能である。というのは、大土地を得たとしても、家族以外の労働力を得られないからだ。土地をもたない者は、他人の土地で働くよりも、フロンティアに向かう。また、タウンの政治に不満があれば出ていくことができる。つまり、ここでは成員が遊動性(自由)をもつことが平等をもたらすのである。/ タウンは評議会によって運営され、自治的な裁判制をもっていた。タウンが拡大することはない。その自治性を維持したまま、他のタウンと連邦してカウンティ(郡)を創る。さらに、カウンティもまた自治性を維持したまま連邦して、ステート(州)を形成する。

【 おまけ その 3 】

● 百年の孤独

ガルシア・マルケス(1927 - 2014)『百年の孤独』では、主人公に殺されたブルデンシオ・アギラルという男が死してなお、生者のように家の中庭に立っている、というエピソードが語られる。これはシェークスピア(1564 - 1616)『ハムレット』に登場する亡霊も想起させた。面白いのは、このような亡霊は、亡霊だからといって、無視できず、いずれも強いリアリティをもち、なにより主人公に行動を促す。すなわち、主人公はそれを受苦する他はない。

【 おまけ その 4 】

● フェルメールの絵画の静けさについて

前回の中野京子『フェルメールとオランダ黄金時代』で、参加者のみなさんから、フェルメール(1632 - 1675)の絵画に「静けさ」を感じるという意見が多く興味深かった。レジュメでは「フェルメールはいかにも「物」らしい対象を描いたのではなく「出来事」を描いた」と、結論したのだが、この「出来事(= 運動)」と、「静けさ」という感覚が両立するのはなぜだろうか。

ポール・ヴァレリー(1871-1945)は、『ドガ ダンス デッサン』で、画家のドガ(1834 - 1917)を論じている。そのなかの「ダンスについて」は、「出来事(= 運動)」と「静けさ」について考えるヒントがあるように思えた。

バレエにおいて、全体が動かなくなる瞬間があるが、その数秒のあいだ踊り子たちの集団は、固定されてはいるが持続しない装飾、生きた身体がそれぞれある姿勢を取ったままびたりと停止し、不安定なものを独特の形で形象化する組織体を、観客の眼差しの前に差し出す。踊り子たちはある姿勢を取ったまま、いわば身動きできなくなっているのだが、その姿勢は通常の姿勢 — 力学と人間の力のおかげで、一定の状態を維持したまま……別のことを考えていられる — そんな姿勢とはまるでかけ離れた姿勢となっている。

そこから、次の驚異的な印象が生まれる。〈ダンスの世界〉には、休息のための場所がない、という印象だ。不動の姿勢は力づくで強いられたもの、一時的で、ほとんど暴力的な状態であり、それに対して跳躍、歩調をとった歩み、つま先立ち、軽い跳躍や目もくらむほどの旋回が、きわめて自然なあり方、自然な行為の仕方なのだ。ところが、日常のありふれた〈世界〉では、行為は過渡的段階にすぎず、ときどき行為にエネルギーを込めることはあっても、そのエネルギーのすべては結局、何らかの仕事をやり尽くすことに用いられるばかりで、過剰に興奮した身体というばねによって再開したり、自分を更新したりすることはない。

(p.33 - p.34)

日常のありふれた 〈世界〉	ダンスの 〈世界〉
一定の状態を維持したまま……別のことを考えていられる	休息のための場所がない
静止が常態で、運動 = 行為は、何かしら目的を遂げるための過渡的段階	運動が常態で、静止は <u>均衡</u> (イソノミア)
	例えば、ダンス、サーフィン、一輪車

つまり、フェルメールの絵画に感じた静けさとは、運動を常とする世界を垣間見せる、均衡としての静けさと

考えられるのではないだろうか。

スピノザと遠藤周作『深い河』を結ぶ

❶ 私たちはすでに河の流れのなかで生まれ、生きている。

私たちは神という実体の変状である(中略)「水は水としては生じかつ、滅する。しかし実体としては生ずることも滅することもない。(第一部定理十五備考)」水は化学的に分解してしまうこともあるでしょうし、固体や気体にもなります。しかし水へと変状していた実体が消え去るわけではありません。(『はじめてのスピノザ』 p.80)。

大津は神について次のようにいう。

「ぼくが神を棄てようとしても……神はぼくを棄てないのです。(『深い河』 p.68)」「神はいろいろな顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います(p.204)」

❷ 本質は「形」ではなく、「力」である。コナトゥス。

たとえば競走馬や牧場で見る馬と、アフリカのサバンナにいる野生のシマウマとを、私たちは同じ馬だと考えます。色や模様は違うけれど、どちらも馬の形をしているからです。

でも実際には、両者の生態は全く異なっています。家畜化された馬は人を背中に乗せることができますが、野生のシマウマにのることはできないそうです。動物は普通、自分の背中を預けるなどという危険なことはしないからです。つまり、家畜化された馬がもっている力と、シマウマがもっている力はその性質が大きく異なっている。

力の性質に注目すると、馬とシマウマはまるで別の存在として現れます。(『はじめてのスピノザ』 p.59)。

コナトゥスがこのような「力」だとすると、どれほど見てくれが変わっても、あるいは、時間や空間を隔てても、コナトゥスとしては同じ働き、ということがあるのではないか。『深い河』の最後で、美津子は次のように考える。

玉ねぎは、昔々になくなったが、彼は他の人間のなかに転生した。二千年ちかい歳月の後も、今の修道女たちのなかに転生し、大津のなかに転生した。(p.369)

つまり、転生するのはコナトゥスだと考える。どれほど見てくれが変わっても、あるいは、時間や空間を隔てても、コナトゥスは消えない(転生する)。むしろ、そのようなコナトゥス、力の働きを没却してきたのが、近代ではなかったか。コナトゥスは目で見ることができないがゆえに。